

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

+ ~ プラスマイナス~なふたり

【作者名】

利用規約

【あらすじ】

これは、とある日の日常風景。

何処にでもある話で、何処にでもいる人のお話。

磁石のプラスとマイナスのような二人の青春グラフィティ（のはず）

+ くプラスマイナスくなふたり

最初に一言言わしてくれ！

俺は彼女が苦手だ。

いつもと同じSHR終わって間もない放課後。生徒は早々に
はけて俺一人だ。

俺はというと、一人教室で悩んでいた。

学校一のお調子者で馬鹿な問題児で有名な俺は男子からの人望は
厚いが、女子からはつきりいってユミを見るような眼差しを向けられ
ている。

つか、今更ながら女子ちよい酷くね？

そんな女子の中で、特に俺を目の敵にするのがクラス委員の仙道あ
かりだ。

こいつの性格はまあ絵に描いたような委員長キャラで、落ちこぼ
れの俺が気に入らないのかいつも突っかかってくる。

はつきりいって俺はこの女が苦手である。

俺はというとさつきからこの女の対策についてひとしきり考え、結
論無理という考えにいたるのを何度も繰り返していた。

ムムム。頭痛いぜ……。

ため息混じりに一人で机の上に突っ伏していると、ガララッと教室
の戸が開いた。

俺は殺気のようなものを感じ、顔を恐る恐る上げた。

げっ、委員長だ。

はああ……ほらほら、なんかそんなこと脳内会話したらマジでき
たよ？

もお、勘弁してよおお。

彼女は目を吊り上げ、口を尖らせつつかつかとこっちに歩いてきた。

「ちよっと、神崎君!! 先生からあなただけ進路希望未提出だって言
われたんだけど!!」

「あ

そういやあったあった。そんなもんが。今は家の机の中だろうか。

「あゝ、そのなんだ……悪い。家に忘れた」

その一言に彼女は嘔みついてきた

「はあ!? 今日が締め切りだって先生行ってたでしょ!? なんて忘れるのよ!!」

すごい剣幕だ。やべえマジ切れしてる……

「だ、だから悪かったって、ほらこのとーり!! 明日ゼってーもってくっから!!」

俺は両手を合わせてぺこりと深く頭を下げた。

「はあゝそういうわけにはいかないのよ。都合上今日までじゃないと駄目らしいのよ」

「えっ!? マジで?」

「だからあれだけ提出日厳守って言ったのに……。で、どうするつもりなの?」

委員長が心の底が呆れかえっていた。

「わかった、わかったよ。今からソッコウ取りに帰っから。な、それで良いだろ?」

「なに家近いの?」

「んゝ片道一時間半くらいかな?」

そうなんだよなあゝ。俺んち結構遠いからなあゝ。

「はあ!? すぐなんて無理じゃない。あなた、逃げるんじゃないでしょ?」

「はっ! 人聞きの悪い。俺は約束は死んでも守るって巷じゃ有名なよゝゝ」

これは、マジ話だけ。なにせ、俺の座右の銘だからな。

委員長は少し黙った。あゝ、やっぱり俺の言ったことだから疑ってんのかな?

そして、沈黙は破られ委員長は静かに口を開いた。

「……わかったわ。先生にはあたしから行っておくから行きなさい」「そうだろ。そうだろ。やっぱり俺の言ったことなんて……ええゝゝゝ

!! 信じてくれんの!!」

嘘! 信じてくれんの? なんで? WHY?

正直彼女だけには信じてもらえないと思っていた。

「何? 嘘なの?」

そんな睨み付けしないでくださいよ委員長様! スツゲエ怖いっす。

「いえいえ滅相もない! すべて、まるっと真実でございます!」

「だったら、早く行きなさい! 時間ないんだから」

委員長がつり目で俺を急かす。

「オッス!! サンキュー委員長!」

俺は教室を飛び出し、自転車置き場まで走り出した。

はあ……、本当はこのまま逃げたいけどそれでは俺の信条に反するし委員長も信じてくれるしなあ。さあ〜と、んじゃまこは委員長のためにがんばるとしますかあ〜。

くだらない事を考えてるうちに、自転車置き場に来た。

俺は自転車にまたがり、拳を鳴らし両手で頬を叩き、気合を入れた。

「……っしやああ!!」

ぎゅとグリップを握って力強くこぎ出した。

自転車で勢いよく校門を飛びだし、坂を下る。

初夏の蒸し暑い風が、俺の体を包む。

額の汗を手で拭いながら家へと急いだ。

そして約2時間半後。

はあはあはあ……い、息が……。

自転車本気で漕いだから、予想時間よりは少し早く帰ってこれた。

その代わりに汗がダラダラで、めっちゃしんどいです……。

息も絶え絶えに、俺は職員室へ駆け込んだ。

「し、失礼……します」

先生は、火の着いてない簡易パイプ付き煙草をくわえ雑務をこなしていた。

「はあはあ……せ、先生……。も、持ってきました……」

俺が近づくと、先生は俺のほうに向きなおる。

「はいよ。」苦勞さん。まあこれでも飲んでけ」

先生はそういうと未開封の缶のお茶をくれた。

たすかったあ。喉カラカラだったんだよ。あんたはえらい!!

マーベラーズ!! よっ教師の鑑!!

などとまあ脳内で先生を讃えながら、一気に飲み干した。

「ぶはー!! 生き返るう。先生あざーっす!!」

「おう。そんじゃ、気いつけて帰れよ。あ、後彼女にも礼言っつけ?

ずっとお前を待っててくれてたんだから」

「え、はあ」

先生に別れを告げ、職員室を後にした。

先生の言ってた彼女って誰だ? うんわからん。

俺は、頭をひねりながら教室にかばんを取りに戻った。

俺は教室まで差し掛かって、教室内に誰かがいることを察知した。

ん、誰がいる?

だれだあ、こんな時間に? もう六時前だぞ。

俺は恐る恐る教室に入った。

「え?」

俺の視界には俺の考えが及ばないことが起きていた。

なんと委員長がいた。

まさか、ずっと待っててくれたのか……。

委員長は自分の席で椅子にもたれて眠ってしまっていた。

眠っている彼女の顔は、とても普段からは創造できないくらいの穏

やかな寝顔だった。

こうしていると意外と委員長もかわいいな。

つつい鼻の頭を突いたりしていた。……って、何してんだ俺

はああ!!

「んっ」

委員長が目を覚ました。

「お目覚めはいかがですか? プリンセス」

俺はさっきまでの焦りを消し去るがごとく、まるでエセ英国執事の
ような挨拶をして見せた。

「ふぁ……おはよう………え、はじょう!!」

彼女は俺を見るなりびっくりして飛び上がった。

「い、いい何時からいたのっ!？」

「ついさっき来たところだけど」

「今たまたま寝てただけだからね!? ほんの一分前まで起きてたからね!? 決して神崎君が行ってからずっと寝てたわけじゃないからね!？」

あえて言おう。嘘が下手過ぎると!!

まあ実際には、言わないけど

「いや、別に良いけど。寝てたんなら寝てたで。待たせてた俺が悪りいんだし」

彼女は赤面しながらこう続ける。

「あ、あのこの事はクラスの誰にも言わないでね!? 委員長がこんな事してたとか思われたくないから……」

「>!?」

意味わからん。別にバレても良いじゃん。聖人君主じゃあるまいし、生きてりゃ居眠り位するでしょ? 普通。

「言つの、言わないの!? どっち!？」

委員長は机をバンツと強くたたいて、切羽つまり気味のキレ口調で言った。

「分りましたあっ!」

彼女の剣幕に圧倒され、敬礼して答えてしまった。

そういえば、彼女の浮いた話はまったく聞かねえな。

友達とかも、いなさそうだし。

まさか、ずっとお堅い委員長キャラを作ってたのだろうか……。きつと俺が思ってる以上に結構こいつも大変なんだろうな。

そう思うと、急に委員長が愛おしく思えた。

気が付くと俺は無意識のうちに委員長の頭を撫でていた。

彼女のしなやかな黒い長髪からは甘い匂いがする。

彼女の顔はやさしい顔つきになり、夕焼けのせいか頬が紅潮しているようにも見えた。

「あっ」

我に返ったお互いはびっくりしたような恥ずかしいような感情でいっぱいになり。次の瞬間赤面して背中合わせになっていた。

とてもじゃないがお互いに今は相手の顔なんて見られねえからな。

「い、いきなりなにすんのよ!!」

委員長はキレていた。きっとまだ顔から火が出るくらい赤面してんだろうなあ。まさに俺がそうだし。

「す、す、すまん。なんか場の雰囲気にもまれそうになったんだよ!!」

我ながら苦しい言い訳だよな。おい。

「大体なんでまだ残ってたんだよ? 先帰ってて良かったのに……」

よし、何とか話をそらせたぞ。

「だ、だって……私委員長だもん……。あなたに取りに帰らせといて、言った本人が帰るって言うのもなんか嫌だったし……」

「は? 別にそんなの俺が悪いんだし委員長関係ないじゃん」

委員長の生真面目さには、ホント頭が上がらないねえ。

「それに……」

彼女が恥ずかしそうな口調で続ける。

「あなたのこと信じてたから。嘘はつかないって」

くうく!! かわいいなあ。

いつも自分のことを目の敵にしていたあの委員長様からこんな信頼を寄せられていたなんて、くうく!! 涙が流れそうなほどの感動だよ!!

だんだんと落ち着いてきた俺たちは、お互いに体を向きなおした。

そして俺は委員長に笑顔を作って、

「ありがとうな。い……優希」

おもいきった。俺、めっちゃ思い切ったよ!! なんか名前で読んじゃったよ! 恋人でもないのに。

さすがにやりすぎか。これは怒るぞ?。

「スンマセンッ! 調子に乗りすぎましたあっ!!」

スライディング土下座をしながら、目にも留まらぬ早業で謝った。

「……いい。それより早く……帰ろっ」

「へっ!? あ、ああ……そうだな。帰るか」
あれ、何も言わない。いいのかな別に? 俺思わず身構えちゃったよ。

そのまま教室を後にした。

俺は優希を駅まで送っていった。

その間は特に会話もなかったな……。

駅でようやくお互いに口を開いた。

「また明日な」

「うん……また、明日」

優希のはにかんだ笑顔が眩しいっ!!

へえ、あいつこんな顔もするんだな……。

とか考えていたら、彼女は急に立ち止まり俺のほうに振り返った。

「また……明日。……み、峰斗君」

「……………へ?」

あ、あ、あ、あの彼女が!! 俺の天敵とまで言われたあの彼女がですよ? 俺の名を! しかも下の名を呼んだよおおお!!

ヤベツ。なんか一瞬ドキってしちゃった。

俺は笑顔で手を振って答えることにした。

「優希。また明日あ〜!」

力いっぱいブンブン手を振った。

彼女は恥ずかしそうに駅の人ごみに消えていった。

「わっしょ……」

俺もまた、家に向かって動き始めた。

それにしても今日はあの委員長の意外な一面を見たかも知れないぜ。

ガミガミうるさい鉄仮面で苦手な奴だと思ったけど、俺は彼女の見方が変わったかもしれない。

彼女のやさしさと、時折見せる愛おしさに見せられたのだろうか。

俺の心の中で委員長が……優希が大きな存在になっていたような気がした。

だが、まさかお互い名前呼び合う日が来るとは思わなかったなあ

く。少しは仲良くなれたかな？

明日からはもう少し楽しくやれるだろうか。

そうだ、もう少し真面目になろう！

俺は新たな決意を胸にしながら、夜はふけていった。

あっそうそう、閉めに一言!!

俺は彼女がそんなに苦手じゃないかもしれない。